

平成18年3月31日

京都府教育委員会
教育長 田原博明 様

八幡市域中高一貫教育に関する研究協議会
座長 小田垣 勉

八幡市域における中高一貫教育の在り方について

中等教育のより一層の多様化、選択肢の拡大を図るため、八幡市域中高一貫教育に関する研究協議会では、平成17年6月以来、5回の協議会を開催し、「八幡市学校再編整備計画」及び「府立学校再編整備計画」の趣旨・ねらいも踏まえながら、八幡市域における望ましい中高一貫教育の在り方について協議しました。

については、下記のとおり、その内容を報告します。

記

1 形態

中高一貫教育には、中等教育学校、併設型及び連携型の3形態があり、それぞれに独自の特色がある。中高一貫教育の導入に当たっては、その趣旨やねらい、児童・生徒や保護者のニーズ、地域の状況等を踏まえて、各都道府県で十分検討の上、各地域に最も望ましい形態がとられている。

八幡市域においては、平成15年度より小中高連携の取組がなされ、小学校から地域が一体になって子どもを育てていく、地域密着型の教育活動が展開されている。八幡市域の今日までの実績を考慮し、地域全体の教育力の重厚な底上げを図る観点、地域おこしや地域での人材育成の観点から、八幡市域においては、連携型中高一貫教育を導入し、平成18年度より八幡高校に導入される総合選択制と絡めて、地域に根ざした教育活動・教育内容をより一層推進するのが望ましいのではないかとこの意見が多かった。

一方、連携型と併置する形で、南キャンパス（仮称）に医療系進学に特化した併設型なども考えられないかとの提案もあった。

2 連携型中高一貫教育

平成19年度に八幡高校と南八幡高校は再編され、普通科総合選択制（現八幡高校：本校）と専門学科「人間環境科」（仮称）（現南八幡高校：南キャンパス）を併置した新しい高校となる。またそれに先立ち、平成18年度には、八幡高校に普通科総合選択制が導入される。連携型中高一貫教育については、本校の普通科総合選択制と

八幡市立中学校との連携を中心に協議した。

八幡市内には、市立中学校が4校(男山中学校、男山第二中学校、男山第三中学校、男山東中学校)ある。他の都道府県で設置されている連携型中高一貫教育の全国的なパターンから判断すると、八幡市域においては、『1高校・1中学校型』及び『1高校・4中学校型』のパターンが想定される。

(1) 『1高校・1中学校型』

『1高校・1中学校型』では、特定中学校(A中学校)への区域外就学を認め、A中学校内に「連携コース」と「一般コース」を設け、本校の総合選択制と連携することとなる。

「複数校と連携するより、密度の濃い連携ができ、中高一貫教育の付加価値をつける点では、中学校、高校双方により大きなメリットがあるのではないか」「学習が組み立てやすく、成果が得られる」など、支持する意見の一方で、「連携校(A中学校)と他の中学校での教育内容に差異が出るのは問題ではないか」「受験競争の激化を招かないようにしなければならない」などの声もあり、特定中学校との連携は、『八幡市学校UD(ユニバーサルデザイン)化構想』における、小中一貫教育を軸とする方向性と合致しないため、『1高校・4中学校型』の協議へと移行した。

(2) 『1高校・4中学校型』

『1高校・4中学校型』では、地域性を重視した地域全体での取組が可能であり、学校UD化構想の理念にも合致する。「各中学校に連携コースを設置して、子ども達に選択させてはどうか」「連携コースという選択肢を設定すべき」との意見があった。

八幡市域の場合は、いわゆる“都市型”の連携であり、高校の募集定員枠は、連携校となる4中学校の志願者全員を受け入れるキャパシティーはなく、必然的な結果として多くの不合格者がでることが予想される。中高一貫教育の趣旨を踏まえ、予想される課題(選抜における公平性の確保、簡便な入試による学力低下の懸念など)や期待できる成果を整理しながら、『1高校・4中学校型』に焦点を絞り、八幡市域にふさわしい連携形態、方法、内容等についてさらに議論を進めた。

3 連携型中高一貫教育 『1高校・4中学校型』

「中学校と高等学校を接続し、6年間の学校生活の中で計画的・継続的な教育指導を展開し、生徒の個性や創造性を伸ばす」という中高一貫教育の趣旨を踏まえつつ、連携型中高一貫教育のねらい等を下表のように整理し、具体的な中身を協議した。

1 ねらい

連携校間での教育活動における連携・交流及び地域に密着した連携・交流を進め、多様な個性の伸長や優れた才能の開花を目指す。

地域の振興

人材の育成

多様な学習ニーズへの対応

地元中学生の他地域の高校への流出を防ぐ

2 連携内容

教科指導

相互乗り入れ・交流授業、総合的な学習の時間での連携、教材開発、進学補習、教育課程上の特例措置の活用など

学校行事

文化祭・体育祭、講演会など

部活動等

合同練習・指導者連携、生徒会活動での交流、ボランティア活動等の合同実施など

施設設備の相互活用

中高一貫教育が導入されるまでは、中等教育は前期と後期に別れ、学力検査と呼ばれる入試で接続されていた。中高一貫教育は、その制度に風穴を開けるべく導入されたものであり、連携型高等学校への入学者の決定に当たっては、学力検査を行わない、いわゆる簡便な方法による入学者選抜（面接、実技等）が可能となる。

(1) 高校入学者選抜における公平性の確保

まず、高校入学者選抜において、八幡市内の連携型中学校と他の市町村の中学校間の公平性を如何に保つかが課題となる。全国的に見ると、連携型高等学校へは、連携型中学校からは「中高一貫教育選抜（簡便な入試）」と「一般選抜」、それ以外の中学校からは「推薦入学」と「一般選抜」をそれぞれ受験できるシステムになっている。

従って、過去数年間に八幡市内の中学校から八幡高校へ進学している率を算出し、本校（普通科総合選択制）における「中高一貫教育選抜」、「推薦選抜」及び「一般選抜」の募集定員の比率を慎重に設定することにより、八幡市内の連携型中学校と他の市町村の中学校との公平性を保てるのではないかと。

(2) 簡便な入試の導入に際して

「平成17年度中高一貫フォーラム」の分科会（連携型）では、「簡便な入試は学力の向上に役立っていないのではないか」ということが話題となった。「簡便な入試＝簡単に入れる」という安易な受け止められ方が児童・保護者になされた学校で

は、学習意欲の減退 学力の低下の傾向が現れている。

一方、高校側がどういう入試をするか（学力検査はしないが、中学校3年間の学習成果を見る：例 課題研究の発表、面接など）ということを経験側へ伝え、市町村教育委員会との連携を図りながら、生徒・保護者に徹底している学校では、「簡便な入試＝受け入れられる」というような印象や誤解を与えることなく、簡便な入試の導入が目的意識の高揚や学力の向上に役立っているとの報告もあった。

簡便な入試の導入に際しては、中学校、高校、市町村教育委員会の三者がしっかり連携を取り、児童・保護者への広報に努めるとともに、中学校での進路指導の充実を図ることが大切である。

(3) 連携コースの設置及び具体的な内容

本校普通科総合選択制と八幡市立4中学校（男山中学校、男山第二中学校、男山第三中学校、男山東中学校）による連携型中高一貫教育を効果的かつ有益にするために、連携コースの設置及び具体的な連携内容等について意見交換を行った。

主な意見は以下のとおりである。実施に向けては、中学校・高等学校間での試行や課題の整理など、さらに検討を要する。

- ・各中学校に連携コースを設置し、希望に応じて選択させる形が望ましい。また、八幡高校の総合選択制では、アドバンスエリアとユニバーサルエリアを設定しているので、中学校では、「進学重点型」と「一般型」の2種類の連携コースを設置し、高校のそれぞれのエリアと連携することで中身の違いを出せないか。
- ・カリキュラム連携等については、例えば、特定曜日の午後、中学生が高校へ一斉に移動し、高校で学ぶようなことも可能ではないか。また、土曜日の有効活用も考えられるのではないか。
- ・八幡高校で今年度実施した高校進学講座（月1回、土曜日：英数国の学習状況診断テストの問題演習・解説、面接等）は100人を超える参加があり、生徒たちは早期より目的意識を持って意欲的に取り組み、効果があった。AO入試的な取組の導入や総合的な学習の時間の活用などの取組をすれば、意欲のある生徒が集まる。
- ・選択授業の時間を活用して、高校の先生に発展的な内容等を教えてもらう。
- ・中学校の選択教科と高校の学校設定科目や教科と連携させ、中高6年間を見通した特色ある取組を進めるなど、教育課程の特例処置を利用すべきではないか。

4 併設型中高一貫教育及び中等教育学校

平成19年度に南キャンパスに設置される専門学科「人間環境科」(仮称)を対象とした中高一貫教育について、次のような意見があった。

- ・八幡のことを考えると連携型でいいが、山城エリアで考えると山城地域に中等教育学校があってもいいのではないか。
- ・連携型と併置する形で、難関校を受験していく人材を輩出するねらいを達成する中等教育学校や併設型も考えられないか。
- ・併設型については、学力をつける視点と人間関係の形成への影響についてじっくり研究していくべきである。
- ・南キャンパス構想に、併設型か中等教育学校による中高一貫教育の発想を盛り込む余地はないのか。中等教育学校を設置し、本校の普通科総合選択制との競合を避ける形で、医療系の大学進学を目指す高校生を育てるといった構想は持てないか。
- ・中高一貫教育のメリットは学際的であるところであり、早い段階で専門性を身に付けさせる専門学科は、6年間のスパンでという中高一貫教育の理念に合わないのではないか。
- ・八幡にとってのメリット、京都府にとってのメリットも考え、専門学科での併設型等の中高一貫校といった方向性や必要性について議論する必要がある。

5 終わりに

以上、八幡市域における望ましい中高一貫教育の在り方について、各委員から様々な意見をいただいた。これらの意見を参考に、八幡市域全体の教育力の向上に資する中高一貫教育の取組を切に期待する。